

1973・74年度発見の平城木簡

平城宮跡発掘調査部

1973年度の平城宮跡発掘調査では、木簡は推定第2次内裏東外郭後宮区域（第78次南調査）の井戸S E7900より1点出土した。曲物の底板の一片に「白物桶」と三個所墨書した習書木簡である。ちなみに後世では白物とは塩、濁酒などを意味する女房詞であるが、後宮との関連から白粉とも考えられようか。京関係では左京3条2坊の奈良市庁舎建設予定地から1点（『播磨□□』）発見されている（『平城京左京三条二坊』参照）。

1974年度は宮域内で総計280点、宮外の左京8条3坊推定東市遺跡から30点出土した。主な木簡の釈文は「平城宮出土木簡概報十」、「平城京左京八条三坊発掘調査報告」を参照されたい。

推定第2次内裏西外郭（第91次調査）宮域ほぼ中央部で旧地形は2つの丘陵が南へ張り出している。その谷間の低湿地は宮造営時に埋めたてられた。旧地表上には自然木や埴輪片などを含んだ黒色粘土層があり、その上を造営工事に伴う用材の削屑、桧皮とともに木簡を含んだ黒色粘土層が薄くおおっており、整地はさらに約50cm盛土することにより、最初の建物群が造営された。出土木簡点数は242点で、文書様木簡7、貢進物付札33、習書木簡7、削屑167などを含んでいる。特長として貢進物付札が比較的多く、完形品の比率も高いことがあげられる。

年紀をもつ木簡は、和銅2年（1点）・3年（3点）で、すべて和銅年号である。そして貢進物付札の郡里名に「朋郡葛江里」（播磨國明石郡葛江郷）、「綾郡宇治マ里」（讃岐国阿野郡氏部郷）、「尾治国海郡嶋里」（海部郡志摩郷）「三川国飽海郡大鹿マ里」（渥美郡大壁郷）など一字や三字表記のものがみられることは、「続日本紀」和銅6年5月甲子条「畿内七道諸国郷名着好字」の制が出される以前のものといえよう（延喜民部式郡里名条）。また国名には摂津・尾治（尾張）・三川（三河）・近江・越前・丹波・播磨・備前・備中・讃岐・伊予などがみえるが、その尾治・三川や習書木簡にみえる「針間国」（播磨）も古い表記といえる。また国名を記さず郡名あるいは郷名から付札の記載がはじまるのがあるのも藤原宮木簡との親近性を示していよう。「和名抄」不載の里名として「越前国香ミ郡綾マ里」「播磨国宍禾郡山守里」「讃岐国香川郡原里」があり、また「伊予国桑村郡林里」も「和名抄」では越智郡にみえる。

貢進物としては米（白米・庸米）が大半で、他に塩、軍布（海藻）がある。なお米の貢進量を「一俵納五斗」、「俵」と表記するものがあるが、平城宮木簡では余りみられない例である。この他に「越前国香ミ郡」の白米荷札に使われている「ミ」（疊字）は木簡の用例としては注目されよう（写真左下）。また「綾郡宇治マ里宇治マ阿弥俵」の「綾郡」の書体が藤原宮出土木簡と類似するのも興味深い（写真右上・左上）。なお「平城宮木簡二 解説」で「飽臣郡」を碧海郡と解したこと（木簡番号2704）は「飽海郡」の例からみて再考を要しよう。

宮西方官衙地区（第92次調査） 発掘区は推定第1次内裏西面築地回廊の西方で、佐紀池と一条通を隔てて対峙している。区域の北三分の一程は池状の低地であり、南東と南西部が高くな

っており、その中央部を池より南北溝 S D8195が南流している。溝が池より流出する部分から西にかけての最下層は、加工木片などの木屑を多量に含む暗灰色粘土で30~40cm程堆積し、その層中に木簡が含まれていた。出土点数は38点で、貢進物付札5、文書様木簡3、付札4習書1などで、その他は削屑や断片である。年紀のあるのは1点で和銅6年の「越前国登能郡翼倚□」(能登郡與木郷)(写真右下)からの庸米貢進付札である。他の貢進物付札には「三重郡黒鯛廿二口」(伊勢)と貢進物不明の越前・播磨・美作の諸国がある。黒鯛は延喜式の伊勢国貢進物にはみえないが現在のチヌであろうか。貢進物付札以外では「大中 膳部所申年分器」は膳部所用の器の分類付札であろうか。意味は詳かにしないが「常陸那賀郡大伴マ弟末呂 巳刻」は召集や門通行の時刻表記かと思え興味をひく。また「御府謹解」は官衙比定の材料となろうか。

ところで能登郡庸米荷札にみえる、誤って書き記した文字の順序を顛倒するために用いられている“レ”の符号は、天平勝宝6年(754)外島院牒や天平勝宝6・7年(762・3)以前書写の大神宮御飾注文にもみえるが、それより古く、奈良時代初期の用例として貴重である。

左京8条3坊の調査(第83次調査) この宮外の調査区域からは、9・10坪境小路の南側溝S D1155(東市の北外周溝と思われる)の暗灰色砂混り粘土から25点、9・10坪のほぼ中央を南北に開削し、東市の重要な運搬路であったと考えられる運河S D1300の砂層から5点、計30点出土している。主たる木簡の内容は文書様木簡4、貢進物付札1、習書3などである。S D1155からは「水猪」と判読できる紙片も発見されている。木簡では「東宮青奈 直□」という東市で購った東宮に供する青菜の付札や「符 彼民在□」「□百廿文」「進上駄一匹功四束」などがある。また、「召年料荏油一斗三升□/□九年九月廿五日」は東市で扱われた品目を示すとともに年紀を推定しうる素材である。



第1図 和銅の木簡

(綾村 宏)